

山鹿素行集

國民精神文化研究所編

山鹿素行集は國民精神文化研究所より「刊行中の國民精神文化に關する文獻資料の中、思想家著作集の一として編纂」され「六十餘部六百卷を越ゆる遺著の中より、未刊の書を先にし既刊の書に後にして順次之を印行せんとするもの」にして、現在第八卷迄刊行されて居る。毎卷、解題、凡例の外、數葉の圖版を卷頭に載せ、特に第一卷には「素行先生年譜」を掲げて居る。

既刊各卷の内容次の如し。

第一卷——原源發機、原源發機診解、謫居隨筆、正誠舊事、齊

修舊事、治平舊事 別題 治平要錄

附錄 發機診解私淑言 長島元長著

第二卷——武教全書 乾

第三卷——武教全書 坤

第四卷——武教七書詮義 上

第五卷——武教七書詮義 下

第六卷——中朝事實、聖教要錄、謫居童問

第七卷——家譜年譜、年譜資料、東海道日記、東山道日記

第八卷——山鹿隨筆

*

誠に、本集の「序」にも言ふ如く、素行が其の聖教、實學、武教

の名を以て唱道したる所は、要は、「我が神武聖文の本源を極め以て國體の本義を明徴にする」にあり、今日の所謂日本學の萌芽とも言はるべきものである。従つて素行教學の特質として擧ぐ可きは、第一には「神明の洋々、聖治の騷騷、文武煥赫たる中朝の事實に基き、神聖の大道、人皇の聖教を靈章」したる事であり、第二には「修身齊家治國平天下の文事武備の聖學を躋つて（中略）學問事業不岐の實學を唱へ」た事である。第三には「我が文武一徳の武教を大成して（中略）右武の國風を振起」した事である。これ、素行をして近世儒學史上は勿論、廣く日本精神史の上に不朽の意義を持せしむる所以にして、現時國防國家體制下に於ける國民的實踐に厚く培ふ所である。而して尙第四の特質として、此等三者を貫くに強烈なる政治性を以てした事がある。政教一致は儒學一般が其の内容とする所なりとは言へ、其の教學成立の基底に強く政治を持つ事は、確に素行學の特質とすべき事實であらう。「理」とは「條理」なりとし「敬」よりは「禮」を尊び、客觀的制度を重んずる政治的傾向は、其の歴史敘述をば内容のみならず形式に於ても政治史たらしめ、其の兵學を戰鬪用兵の學たるに止めず、治國安民の政治學とするものである。而して素行は人間を君臣、士庶として政治的に把握し、指導者と被指導者、此の上下の制度、秩序の裡に共同體的生活の行はるべきを強く説いて居る。（我々は此處に徂徠への道を見出す事が出来る。）

生活のあらゆる面に深く政治を持つ現時は、又素行の教學が強

くも思ひ出され、其の研究が押しすゝめらるゝ時である。此の時に當つて、研究者の據つて以て立つべき原典が、眞蹟本乃至其に最も近き寫本を得て之を底本となし、確實なる校訂を経て出版されつゝあるは、我々の大なる喜びとする所である。

我々は本集完成の日を衷心、鶴首するものである。(目黒書店發行)(石田一良)

敦賀郡古文書

山本元編

地方誌の編纂は明治の末年より大正年代にかけて連りに企てられ、各地に競つて事業を興す者相踵ぎ著しい流行を現じた。いはば地方文化發揚の様式としてそれは試みられたものであつたと云へる。新に發展せんとする國家活動の基礎事實として、歴史を顧みこれを正しく認識しようとする精神の地方的な傾向であつたのである。従つて地方誌の目的とするところは單に一小地域に會つて存した過去事實の網羅を以つて終るものでもなく、又區々たる所謂お國自慢を誇示する場所でもなかつた。これはまさしく國史の部分としての役割を果すものでなければならなかつたのである。この意味に於いて地方誌は極めて重要な國史の特殊としての價值を藏するものであつたのであるが、不幸にしてこれらの夥しい成書は眞に理解されず、充分に利用されるに至つてゐない。一にその價值を過小視しかちな偏見にも因るが、他方に編纂者の側にも周到な用意と明白な見識とを缺いてゐたことに基くものであつたことは否み難いところであつた。

これらの群書の中にあつて、敦賀郡誌は出色の成果を擧げたもの、一つであることは既に定評がある。事に當つた山本元氏の愛郷と好學とは史料の博搜と公正な見解とによつてその困難を克服して、大正四年に公刊の運びに至つたのであるが、當時蒐集された古文書の集大成は上梓の際に削られ、且つ分册刊行の事も挫折して、久しく編者の篋底に藏められてゐたのであつたが、圖らずも今機縁を得て、當初の計畫を更に大にして、こゝに敦賀郡古文書の世に贈られることになつたのである。これ一に編者の篤學の結晶ではあるが、併しながら同郷の人東北帝國大學助教桑原武夫氏の援助に俟つところ頗る大きいものがあり、又山本氏はその校正の申途にして易登され、事業の完成は本學助教中村直勝氏の厚意によるところであつた。本書は小なりと雖もかくの如き篤志の協力を以つて成つたことは學界の美事と稱すべきであらう。

本書に載せるところの古文書約五百通は社寺諸家の所藏者別に排列され、郡誌刊行の時以後の蒐集に係るものは續集としてあり、集成の脱漏なきにちかひことを思はせる。その悉くは慶長元和以前の年代に屬するものに限られてゐるのは編者の古文書に就いての見解に基くものであるが、こゝに收められた數量は他郡に比して決して少しとしない。敦賀郡の地は狭小ではあるが、北陸道の咽喉を扼し、主邑敦賀は水陸交通の要衝であり、古來の大大たる氣比神宮の神徳を仰いで、地方文化の中心であつたばかりでなく、中央の動靜の影響するところ大いなる地方であつた。従つて本郡古文書の數多くあり、その史料性に富んでゐることは察す